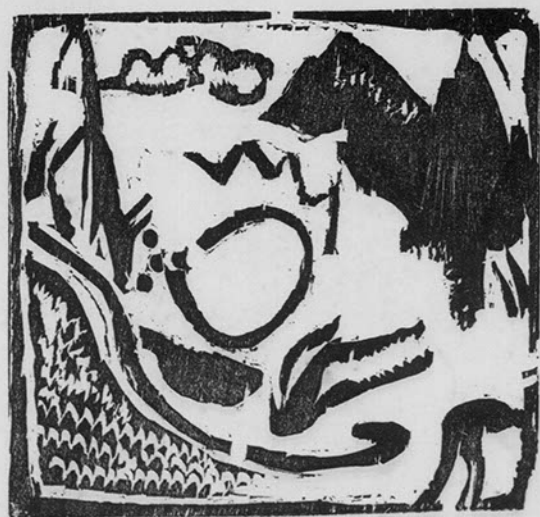
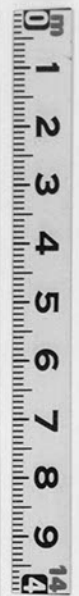


無軌道



創刊號



無軌道・創刊號目次

農村文化に關する雜感 (評論) 君達へ (評論)	三野 混沌 高瀬 勝男
● 詩 野原 直行車 巨彈 畑は光つてゐた 笑つてみる 百姓日記 病氣になつて飲む 鉛色の月 野外労働 雨後の花火	三野 混沌 中野 勇雄 猪狩 満直 長瀬 一美 馬場 卯一 妻木 泰治 横田 卓造 片寄 泰治 島田 春夫 松本 純一
● 短歌 磐梯山 登りて 信濃路	左々木 顯 北條 重光
● 雜詠 冬蠅	押尾 孝 佐藤 義家 松村 きよし
● 八木重吉のこと	中野 勇雄
● 信仰と生活	川合 秋露
● 言語同斷拾遺	松本 純一
● 俳句	十好會 互選
● 兄弟	押尾 孝
● 編輯後記	

農村文化に關する雜感

三 野 混 沌

農村文化は、現在、資本主義國家に於て、その階級層に起つた分化過程により認識し又は確立される。都市労働者階級と農民階級とは如何なる關係のもとに理解されるか、政治的にも經濟的にも如何なる過程を把握するのであるか。即ち、農民階級及び労働者階級のそれぞれの階級層の内外に起れる分離要因と結合要因との根本要因を理解し、これを解決する上にあるのではないか。

これらの問題に關する指導原理やテーゼを、レーニンやブハーリンが、コムミュニストインタナショナルの爲に書かれたもので、極めて不完全ではあるがマルキシズム農村文化を語るものがある。彼等の立場と主張は、集産的農業經營へと組織立てやうとするのだが「勝利を博したプロレタリアートは地代と擔保負債との撤廢に依り、機械の交付に依り、電力の農業經營への移入等々に依り云々」といふてゐる。だが農民階級はその得たる文化段階を通じて如何なる方向に、猶、進轉するものであるか、それは、凡らく階級層内の分化過程から分散へと又、その産業を科學的經營と近代技術で基礎立てられ、而も、農業も工業も粗造も加工も分配も總てを自らする兼業の生活へと事實が立證する文化を持つてあらう。この事に就て、石川三四郎が「土の權威」でいふてゐる「工業は單に大規模にさへすれば經濟的であると考へてゐる人が澤山ありますが、眞に社會生活上の經濟からいへば小規模の方が却て經濟的であります。今後は各地方に水力電氣の利用等も益々盛んになつて來てそれを利用する家庭工業、村落工業等も起つて來ることと思ひます。かくして分散工業が各地に行はれることにより、愈々地方自治の生活は確立されていくのであります」智識も分散される。今迄選ばれた少數の人々に獨占されてゐた智識が、今日では新聞、雜誌書物等によつて普及され平均されていく、尙ほ集産的である政治組織なども分散されていく、と附け加ふ。

レーニンをして「ロシア革命は一九一七年十月廿五日及び十一月七日の變革以後……都市プロレタリアートは、文化的にも數量的にも、貧弱なものであつた。そして距離の隔りは、この上なく拙惡な交通機關しかなかつたので、非常な困難を齎したのである」と嘆かせたロシアにしても、そして亦日本にしても現在、現在の階級分化過程上にあるプロレタリアートを思ひば異常な文化機關を把握し發展してゐることを識るのがある。

君 達

高瀬勝男

民衆は永い間無爲味な藝術に煩ひされてゐた、集團生活に全然關係のない藝術が難多に堆積され累復されて、民衆の單的な解釋と推理を非常に面倒にさせてしまつた。

放縱な無責任な藝術が貴重にされ尊ぶられて民衆にちつとも縁故のない民衆の實踐的世界觀に一つも觸れてない神のオリデナルタイなものが齎らされ藝術の推移を民衆の擲槍と侮蔑に弄戯して藝術は常に永遠の建設であり至上の喇叭とした。勿論藝術は社會から何十歩も前進してゐる、藝術は凸

起した人間の鼻だ、併しだ民衆をわすれて藝術はありこないのだ。藝術は民衆の慾求を完全に指導し補佐してゆかねばならない筈だ、今迄の藝術が享樂の群に入つた貴族主義の延長であり資本主義發達と共に民衆を不具にして個人的凱歌を宣揚し、資本主義の盛衰を萬歳すべく下準備として彼等の環境と倦怠を充す人間文化の藝術である。

藝術は偉大な仕事をするのだといつて、民衆に取つては腐つた抽象的焦點を軍國主義に轉嫁させ藝術の所謂創造理念は謂ふ唯物的に變化しつゝあるのである、鐵砲が擡げられ會堂が建てられた藝術を進んだ妥當だとした。藝術の普遍價值は畫家のカンパスを塗るだけに止め作曲家の作曲は一足と

びに時代をばいいてしまひ、親切だの同情は必要ない民衆を相手にする事が藝術の流行爲であり退化であり惡徳であるとして藝術の偉大な完成を超社會的にそして幾世紀前の藝術の通つてきた過程を辿るのが社會であり民衆なんだ、と集團生活の生産に伴ふ内面的道德意識の發酵したものを無視した社會の上を這る安當の規範に民衆を驅逐する、畫家はなせそのもてるカンパスに新しい色を塗つて民衆と接近しないのだ、詩人はアクセントの良い發音をもつて民衆達と對話しないのだ。民衆を轉ばしはなしで起して塵を拂うのは藝術以外の宗教だと、道德だと學問だと仕事をゆたねたら平民達の生活は愚安のない耐ひられない苦痛と混沌と醜惡と憎惡と排他主義に變つてしまう、それは決して扶助とか團結とかを破壊するとも造ることは不可能なことだ。ノリトより劇の方が友情と安善と緊密と協和が出来るではないか。民衆の慾求するものを充たしてやるのは墮落でない、民衆の慾求が粗野で間違だらけなのを矯めてやるのがちつとも藝術の墮落ではない。民衆の不健康をたへず注意してゆけば民衆は實に勇敢なそして法律をさへ變革することが容易な内包力があるのだ、藝術の墮落は民衆達の不攝生を衛生家として見たからなんだ。資本主義によつて發達し生育した藝術は民衆に故郷をわすれさせた藝術である不生産の藝術である權力の權を通してのみ可能な象牙の塔をもてる藝術は頑固な傲慢なそして癪の強い性質の藝術なんである。

野 原

三 野 混 沌

直 行 車

中 野 勇 雄

俺達の野原を

がらがら音を立てゝ走る軌道

何處にも何んにも持つて来やしない

不消化と疲憊—貨物

俺達の野原はただ廣い

そしてあの小つばけさを笑つた

がたつきめ

あらゆる運輸は俺達の手が届きやしない

俺達は野原を廣くしろ

時は来た、俺達地球を掩ひ廣がる

俺達刈り穫る

俺達は迅速 博大 正確だ

くたばつてゐやしない

そこは安心だ

あらゆる途方に暮れた

あのがたつきめを侮蔑

長い旅程を走り來り

深夜また響々と怒號して走りゆくもの

その乗客は一人も息づくものなく

皆不可解な假面を被つて深い睡りに落ち

エンジン音がガラス窓を微かにたたく

山を登り、谿に沿ひ、野を横ざり、林をくぐり

涯しない旅程をたゞ只管に直進する

この一徹なる行動者、機械

薄暗い窓々に映る現實相を默殺して

死のやうに無氣味なる行進を續くるもの

そして永遠への理想をこの空漠なる虚空に

吹き鳴らして行くもの

巨 弾

猪 狩 満 直

—プロレタリア戰闘曲—

ひとつかたまりになれ!

ひとつかたまりの巨弾
その威力を信じろ、否
ひとつかたまりの肉弾
肉弾をもつて敵の城塞に迫れ！
おおなだらうつ

……大衆！

俺達大衆の前に何ものがあるか？

突進！

そこには絞首臺がある十字架がある

幕進！

そこには明るい大衆の明日がある

畑は光つてゐた

長瀬 一 美

鋤を下ろされる前は一くれの土塊り
そこであつたはれ

種をまかれ

あしゝげく人がそこに運ばれる様になつて

ついに暗い扉は開かれる
つゆつばいあさ
菜つばのしらかぶは一面畑に満されて
そこで
畑は光つてゐた

笑つてみる

馬場 卯 一 郎

たつたひとり
部屋をみまわしてゐると
道化のやうに
笑つてみたくなつた

月

月があるから外に立つてみる
哀れつばい
小さな生きものとして
自分を振返つてみる

墓

十二月十一日

墓がある
今日もほの白い晝の月が出て
たあれも知らない墓

百姓日記

妻 木 泰 治

十二月十日

起きあがつた
醫者も薬も俺には用をなさない
むら／＼とした力が
やがて 光をよびいれた
酷い風に向つて俺達は前進しやう

同じく

寒い風が吹くのに鴉は今日も啼いていた
百姓は畑に出て
凍え切つた大地に はねかへす鋤をふりあげた

朝 朝

今日も友からの手紙
雪で手も足も動かないつて
それでゐて
死ぬことはいやだと書いてある
俺達は戦ふのだと書いてある
團結しようとしてある

前進

前進

百姓軍

萬國の百姓軍よ……と

十二月十二日

貧乏
それでゐてどうにもならないのが今日の百姓だ
驚くな
同輩よ
何もかも無にして
戦場に立て

病氣になつて飲む

横田卓造

夜の喧騒からはなれやうとして
尚 執着を持つ俺の生活

弱い

弱い

俺が弱かつたんだ

馬鹿々々しい戀の唄も

薄暗い場末の女たちにも

おわかれだ

媚りが何?

もう

もう!

人工着色の唇の誘惑にも

無關心な筈だ

只 只.....

あの長い腸の

氣持いい太りと、しびれが

俺の生命の糧なのだ

けれども

美しい袖がそつと胸にかゝるのを

俺は知らないやうに眠つてゐた

夢だらうか

おゝ夢だらうか?

どうでもいいむごたらしい俺の姿

飲め

飲め

あの腸のしびれが

丸々とした太りが

俺は欲しい!!

一九三七、三、三云 カフェーにて

鉛色の月

片寄泰治

鉛色の月は半分に割れて

卵色の壁に切り開かれたたつた一つの窓に

鈍重な光を與へておる

真黒な窓から覗くと

—— ひからびた思想

—— ひからびた主義

—— 瘠せた Proletaria.

—— 太つた Bourgeoisie.

みんな みんな

これから虐殺が始まるそうです

鉛色の月が死んだ

午前二時.....

野外労働

島田春夫

一日ふいご吹きやつたら

軀が木伊乃にでもなりさうだ

乾つからびた咽喉が

壊れたポンプ井戸の様に水を欲しがる

それに石まじりの北風が

ビウビウ横面を吹きなぐるんだ
充血した眼で空を見上げたが
太陽だつてもう山の向ふへ
行つてしまつた

さあ兄弟!

六時の氣笛が鳴るまでもう一働らきだ

雨後の花火

松本純一

夜、ひとりぼっち

うるんだ音にすめらいだ

水甕がいくつもあつてその中に光つてゐる

玉蟲

のびあがつた子供は顔を泥だらけにして

泣きちやくつてゐる

温室の冬

どこからか 網の目をくぐつて

カナリヤの餌を漁つてゐる

磐梯山に登りて

佐々木 顯

噴火口の千ひろの谷のみそこより噴煙あがり硫黄くさしも

登山者のうち集ひつゝおのおの弘法清水を汲みかはしけり

溪流のひびきかしまし東山河鹿の聲もほのかにはしつ
(東山温泉)

家鳴りはげしひざり座敷にうづくまり二階の人の叫ぶ聲すも(六月六日朝地震あり時)

男子等は濱にい行けりわれひとり鶏とともども留守居しにけり

田と畑との一つ新家を借り受けて子等より居るその母をかも

子はひとり浴着だけにて涼しもよ海の遠鳴り近く聞ゆる

わが鶏に餌さをくれんと草摘めば鎮守の森にかなかなの鳴く

信 濃

路 北條重光

みすむかる信濃の國に秋ふかしそかにゆるゝ桑の下枯れ

あせゆけば刈田のひまゆなくこほろぎ秋しかすかに聲ほそりつゝ

杉木立八幡社のすゝふりてひだにおろかむはゝそはのはゝ

岩うらて幾年ならむ小川なれ勢やます太田切川

あかねさす大空みればしかすかにくれなすみつゝ西駒ヶ峯

のきの雨うちつゞく夜小使とざるごうちつゝする茶の冷え

雑 詠

押尾 孝

百姓の子も交るだらう 突貫の兵士らがふみにちる麥の芽

冬 蠅

松村 きよし

ほぐれこぬ心ながらもおとなしく夜更けの蠅を見つゝひさしも

ものうみて爲事手につかずうつかりとよろばふ蠅を見てあたりけり

古り電球のにぶき光りに冬蠅のうごきとほしも影ひきにけり

霜 柱

佐藤義家

霜柱くぐくと見れば一匹の見なれぬ三毛のわが前をゆく

杉木立越ゆる鳥のひとむれにしばし見とれて歩ゆみ止めぬ

一、八木重吉のこころ

八木重吉が亡くなった。

病床に一年有半も苦しんだ彼と彼の家族。

八木重吉は生日のやうに黙つて死んで行つたのであらうか。

日本紙と毛筆を愛した彼。

聖書と桃子（愛児）を笑ひかけた彼。

社會に無抵抗で闘つて來た彼。

彼の詩は憤怒や反抗の主張をば投げつけやとなかつた。

彼は自己の中であらゆる戦を闘ひ、反逆に反逆し、祝祭を

乾杯した。彼は彼の詩にそれらの枯淡なる投影をのみ與へ

た。

そこに彼の詩に對する毀譽褒貶は起る。

彼はそれらをも黙つて受けた。

私はそれが寂しくもあり、物足らなくもあつた。然し、今

考へてみるとそれが彼の社會に對するそれらの表示であつた

のかもしれない。

一面彼は逃避的な社會觀と自然觀をも持つてゐたかもしれ

ぬ。

然し、それは彼の性格と生活とがそうさせたのであらう。

詩集『秋の曙』以後の遺稿はどうなつたか。いづれ加藤武

雄氏らの手に依つて新光に接すること、思ふが。

奥さんや愛兒達を思へば感慨無量である。一昨年の今頃、

彼を柏の中學に訪れた。そして愉快な晚餐の後、彼は聖書の
扉に「わたしは、自分の詩が、聖書の註釋であれとよりほか
にのぞみません」

と記して贈つてくれた。

私は今靜かにその時のことを想ふ。

中野 勇雄

信仰と生活

我等青年が信仰なくして社會に立つて往ふ、とするのは困難
である、のみならず寧ろ不可能であり、且つ非常に不安なこ
とである、自由なき生活が奴隷の生活であるとは腰を聞く
ことであるが、眞の自由とは純然たる精神上の事であつて外
部的な境遇の上のことではない、所謂運命に支配される、人は即
ち境遇の奴隷であつて、決して自由人とは云へないのである
隨つて眞に自由獨立の生活とは周圍に支配せられざる信仰生
活より生ずるのである。近來労働問題や、小作爭議は一つの
流行のやうになつてゐるが、しかしそれは元より當然な結
果である、何となれば、争ひは次の新しい種となるが、決し
て眞の和解の實を結ぶといふやうな、そんな因果の法則はな
い、一つの争ひは次の新しい争ひの種をまく、といふのが嚴

言語同斷拾遺

—「白鳥綺談抄」—

疫病の神

正徳年間の頃、三河國吉田町に古着商を營む

川合 秋露

然る此世の法則である然らば如何にすれば眞に徹底的なる
根本解決が出来るか、それは基督の言はれし如く「己の隣を
己の如く愛する心」が資本家と労働者の双方に起らなければ
駄目である、制度や、法律がいくら制定せられても人の心
が改まらぬ以上、問題は何時までたつても解決せぬ。
資本家が眞に労働者の幸福を考へ、労働者は自から資本家の
ことを眞面目に考へて働くやうになれば、所謂労働爭議なん
かは陽春の光りを受けた淡雪のやうに消え失せるに違ひない
無論こんな望ましい理想的世界が、難作もなく出現するも
のと空想してゐるのではない、しかし自分は飽くまでも信仰
に依つて生活問題の一切を解決して行きたいと望んでゐる、
我等の前途には艱難の山もある、怖い誘惑の谷もある、し
かし艱難や誘惑の一切の障害を越えて進み行き得る力も唯だ
一つの信仰の力であり得る事を深く思ふのである。

善右衛門と言ふ者、或武家方から幕を五張ほど
調達を受け三張は纏つたが残り二張を岡崎町に求め
たがと、のはず詮方なく名古屋へ買出しに向向
いた、途中大濱茶屋あたりで日暮れに逢ひ知邊
の茶屋に一泊したが折柄中秋の夜長なので名古屋
屋まで馬を頼み夜半大濱を出る時馬子が近道あ
りと言ふのでこれ幸ひとこの道つたひをとり鳥
頭村の入口を過ぎる時に此あたり小松や薄など
深く繁つてゐる野道であつたが突然旋風捲起り
馬は足を折りすくめ地にうづくまつて了つた
其時善右衛門も馬子も急に氣色悪くなり覺えず
地に伏すと小松の所から身長一丈五尺ほどの仁
王に似た大入道現はれ百煉の鏡に等しい眼を光
らせてこちらへ歩んでくるので益々驚愕しうろ
／＼するうちに何處へか行過ぎたやがて本性に
立返つた兩人は急いで馬を馳り立て一里餘のと
ころまでくると漸く夜も明れたので兎ある農
家に立寄り煙草などを吸つてホッソ心落着け
たが善右衛門驚と不審にたえずその家のあるじ
にこのあたりに天狗または怪異の類ひありやと

訊けば山中にあらざればそのやうな妖怪なしと一笑に附して得るところなく先づ何事もないことを喜び乍ら名古屋の問屋に着き市中に暮を調へ兎角するうちに急に發熱を催し頭痛激しく訴へるので近くの醫者を招いて診ると時疫の脉態なりと解つた、加へて伏熱あれば覺束なしと言はれるに及んで例の化物に出合つた話をし薬を加減して用ひたがその驗しなく一應吉田へ戻ることゝし通し駕を雇つて立歸へつたが益々熱氣盛んになり服藥の効なく終に十三日に相果てた、善右衛門が化物即ち疫病の神にみこまれたその前後が妙に虚々實々に運んでゐる點科學的分析が邪魔立てしなくて人間らしい力の迷信がはつきり窺はれる、それに時疫の脉態なりと頷いた醫者も充分時代的怪力亂神を語つたものらしい。

閻魔主への書狀

越後上杉の家老直江山城守兼繼は文才に秀で武勇にも亦勝れてその大兵な風格は當時肩をなら

べるものがなかつた、上杉景勝が越後より會津へ國替の時家中の者三室寺庄藏といふ下人を無禮打にした、其罪斬る程のものなきを知り下人の親類共が主君へ三室寺を生かして返せといきまくので山城守これを聞つけて銀二十枚を取らせ鎮まらせんとしたが仲々に承引を受付けないそこで山城守一計を案じ家來に高札一枚をこしらへさせ一筆書こみ自身玄關へまかりこしさていづれにも彼者を返せとある上は是非に及ばず呼返すべしなれど冥途へ呼び遣す人なし大儀ながら三室寺の兄と伯父と甥三人が閻魔の廳へ參り彼者を申請歸るべしと三人を往來の橋で斬罪し例の高札を其の傍へ建てた未得貴意候へ共一筆令啓上候 三室寺庄藏不慮の仕合にて相果候處親類歎候而呼返し吳候へと様々申候に付 則三人迎ひに遣し候間彼死人御返し可被下候

恐惶謹言

慶長二年二月七日

閻魔大王

直江山城守兼繼判

冥官獄卒御披露

右のやうに書きつけた高札をみて誰とて苦情を申込むものがなかつた、殿様氣質からめぐさいと思つてバツサリ斬られて了つたものだけに生還の路があるとは言へない。そこに山城守の合理的な斬罪が成立する、機構された風習に拘泥しないで何處までも事實を事實として仕組む彼の面目に少しのあふな氣も見えぬのは現代じみたカラクリがないからである。

平の一奇事

延寶四年辰五月廿七日、奥州岩城の平は「當時は内藤備州の領内だつた」此日晝九ツ時前から八ツ過ぎまで炎熱酷く病人は死し鳥類も多く死んだ諸人は何んの豫防の方法も講ずる術なく有り合せた水に浸つてやつと助命することができたが此所から二里脇の村方は常の通りであつたとは平だけこんな炎夏を生じたのはどうした譯かさつぱりげせなかつた、多分炎熱が凝り固つてこゝに發生したものとしか考へ及ばなかつ

た。昔しの平は所謂その炎暑なる突變的產物で悩まされたらうが今の平は空ッ風といふ曲者の自然發生的產物に同じ悩みをこと新らしく繰返してゐるにすぎない。發達に發達の背中を掻かれてる現代に於てさうい紙魚臭い言語回斷なことどもが散布されてゐることわりだ、へづまんないことに絶妙な諷諷が粧ひ盛られてあることを知れば無爲な紙屑供養にもできなくなるといふものだ。

松本 純一

俳句

—十好會互選—

◆冬ざれ◆

冬ざれの築洩る水のありやなし
磯にあげて繕ふ船や冬ざる
冬ざれや裏は直に難木山
貨車屑に押して人夫や冬ざる
冬ざれや空高々と老の杉
冬ざれや石門の影松の影
冬ざれて葡萄の棚や傾きし
かんらんの挿葉白く冬ざる
梨畑の棚あれば冬ざる
公園の一燈強し冬ざれて
鋤きし田を走れぬ犬や冬ざる
冬ざれや屋根に石ある家續き
冬ざれの田圃にこそる鳥かな
冬ざれの庭淋しさよ何か欲し
冬ざる屠場に牛の吼ゆる哉
冬ざれの上に下りたる鴉かな

鶯 同 臥 同 汀 同 向 同 秀 同 雅 同 喜 同 上 同 蛇
瓢 峯 城 山 山 山 山 鶴 山 郎 鶴 石

田の麥に施肥する人や冬ざる
冬ざれや葎の中の茨の實
冬ざれの庭其のまゝに移居りけり

◆古曆◆

埃かゝる瓢の下や古曆
曆賣り干大根を潜りきし
曆賣り開かぬ格子をまた次へ
曆賣り何かつぶやく老なりし
覗き見る玩具の箱や古曆
籠り居て曆の果となりけり
日南縁語りて去らず曆賣
嫁迎ふ日數迫りぬ古曆
幾年や綴り合せし古曆
垣結ぶ繩屑踏んで曆賣
つか／＼と来て何人ぞ曆賣り
曆賣り壁ぬる納屋を覗きけり
伊勢の人曆を賣りに來りけり
古曆綴り合せて仕舞ひけり
煤ふりて爐邊の柱や古曆

同 撫 同 同 鶯 同 同 臥 同 汀 同 向 同 秀 同 雅 同 喜 同 上 同 蛇
山 同 瓢 峯 城 山 山 山 山 鶴 山 郎 鶴 石

◆鶺鴒◆

鶺鴒の波に追はれて石にあり
枯野来て眼に水ありぬ石叩
鶺鴒や河につき出し岩鼻に
家建つる張繩越えて石叩
鶺鴒やまださめきれぬ温泉川尻
鶺鴒や米とぎ去りし石の上
鶺鴒や腰の袂の破れ魚簍
石叩今日も見えたり同じ溝
涸れ小川走る鶺鴒二ツ三ツ
鶺鴒や河原の石に陽の冷えつ
ほそゆく瀬川の音や石叩
薄雪に汐まだ寄せす石叩
鶺鴒やツト走り入る芦の中

蛇 同 上 同 喜 同 雅 同 秀 同 向 同 汀 同 臥 同 鶯 同 撫
石 鶴 山 山 山 山 山 城 峯 瓢 山

忽洗ふや笥の尻の小溜りに
福壽草の影旭に映つる銀屏風
双六や兒に従ふて一と勝負

同 美 同
登 里

五句集

庭の底に遠く聞ゆる砧かな
いふり居し椿火一とき燃え盛る

竹 同
尾

兄 妹

押尾 孝

何となく枕邊が騒しいので治助は眼をさました。

昨日から出はじめた鐵道工事の慣れない仕事のせいか體の節々が妙に痛んでまだ眼がしぶかつた何時だらう……彼はつぶやき乍ら柱時計を見上げた。

音を立てないやうに長火鉢の側で朝飯を食つてゐる妹のお葉は、憚るやうにそうつとふり返つて兄の眼がこつちを見てゐるのに出合ふと、いやな奴が案の定起きやがつた、と思つた。彼女はくるりと向き直ると、さつさとややくそみたに飯を食ひつゝけた。

「どこへゆくんだ、こんなに早く」

それに答へやうともせずにお葉はお膳を押しやつて着物を着換えはじめた。

「どこへゆくんだ！」

兄の聲は多少怒りを帯びて彼女の小さい胸を

ぎよつとさせた。

「松蟲さまへ」

お葉はさも言ひにくさうにして氣六ヶ敷い兄に許しを得させて下さいと眼で祈つた。その時母が勝手から握飯を持つて出て來た。

「横町のおゆうさんがすゝめに來て、依田さんに一緒につれてつて貰ふといふから、やつてもいいだらう……この子も年中何處へも出ずに働きづめなんだからね……」

依田ときいて彼は嫌な氣がした。役場の書記をしてゐる、わるく頭の毛ヘコテコテと油をぬつた男の顔が浮んだ、そしてこの頃急に女らしく發育したお葉の胸から腰へかけての線を眺め乍ら何と言はうかに感つた。が結局行く氣であるし母もやる氣であるのに反對する譯にもゆかなかつた。まして横町の従姉が行くといふのだから――。

「行つてもいいさ、しかし氣をつけるんだよ。」

治助が案外すぐ許して呉れたので、お葉はほつとして母を見た。母の眼も嬉しげに輝いてゐた

こんな事なら何故私はあんなにぶん／＼してゐたのだらう……とお葉は腹の中で悔いてゐた。三十幾年の長い間、六ヶ敷い姑に事へて遠慮しいしい暮して來た母は四年前姑に死なれても遠慮の習慣は却々とれないで現在自分の子の治助にさえ氣兼ね勝ちなのであつた。

さうした自分の心に較べて行きたい所へはやりた、見たいものは見せてやりたいと思ふ心が、母としての愛情以外に、蒸し暑い様な熱度をもつて末子のお葉に向けられてゐた。治助にもそれはよく判つてゐるのだ。二人の女共の行きたいと行かせたい心が、六ヶ敷い俺の心を憚り乍ら今朝も早くから起きてゐたのだ……然し父の無い此の家の指揮者として俺は盲目的な愛の爲に家族の危険を防ぐ事を忘れてはならないのだ……どんなに母や妹に悪くまれたとて……彼はそつと暗がりへ向いて涙を拭いた。

お葉はそわ／＼し乍ら仕度を急いだ、治助もそれがたまらなく嬉しかつた。母はもう有頂天になつてゐた。

その中にお葉は時々ゴホン／＼厭な咳をした。治助の眉はサジと曇つた。彼の頭の中には不吉な想像がムク／＼と湧き起つて來た……冷い沼風がヒューヒュー吹き募る山奥の小路を纖弱なお葉が蒼ざめた顔をして、依田とおゆうさんに助けられて重い足をする／＼曳いて行く

「お前、頭痛はしないかい」

治助は小聲でお葉に聞いた。

「え、ちつとばかり痛いしそれに熱もあるやうだけれど……」

彼女はすつかり安心してゐたので在りの儘を言つて、ふと兄の顔のまづいのに氣付いた……

「でも何ともありませんわ、直癒りますから大丈夫だわ……」

彼女は心配しいしい色々大丈夫だと言ふことを並べたてた。

けれども遂に絶望の宣告を受けねばならなかつた。

「およし、またこの次にお出で、風邪氣だのに昨日から空も曇つてゐるじやあないか。雨にで

も降られたら大變、行つちやあいけないよ」
あゝ何といふことだらう。たつた今行けと言
つたぐせに何と言ふ情ない兄だらう。こんな愛
情のない奴が兄だもんか。何だ私の兄だもんか
お葉の眼からは絶望の悲しみと兄の無情に對
する憤怒とをこき交せた熱い涙がポロポロ落ち
た。

雞卵を一つ二つと賣り溜めた金で買つたらし
い新しい麻裏草履とキヤラメルとを持つていそ
いそ這入つて來た母は、あまりの光景に物も言
へず立つた儘あきれてゐた。

「どうしたのお葉！ なせ仕度をとつてしまつ
たのさ。何も遠慮することはないのになせやめ
るの？」

母の聲はいまいましてにふるへてゐた。

「お母さんこの子は風邪氣なんですよ、人間
には遠慮しなくつても病氣には遠慮しなくつち
や大事になりますよ」

お父さんだつて肺の病でと言ひたい言葉を治
助はぐつと呑み込んだ。治助の説明は底力を持

つて壓へつけるやうに老ひた母の耳にびんとひ
いた彼女の眼にも口惜しさうに涙が浮でゐた
その日の午後からお葉は頭痛がして起られな
いと言つて寝込んでしまつた。熱は段々高まる。
咳は止め度なく出る、頭は割れさうに痛んで來
た、白い綿のやうな雲が急しく眼の前を通つて
行つた

「行かなくつてよかつた、家にゐてさへこんな
騒ぎだもの……。それにしても醫者に見せずば
なるめえな」

工事の仕事から歸つて來た治助は、絆天着の
まゝお葉の枕もとに座つて、斯う呟き乍ら貧弱
な財布の中を思つた。

兄の太い聲が耳もとで響いた時お葉はやつこ
意識づけられたやうに夢心地から呼び戻された。

彼女はおのれの中で兄様お許し下さいと叫んだ。
そして赤く眼れ上つた臉に力を入れてそつと瞳
つたけれど、止めどなく流れる涙の爲に兄の姿
は霧の中の山のやうにバツと大きく霞んでゐた

(丁)

9

和洋銅鐵
金物一式

平町五丁目

新學期の御用は

マルトモへ

書籍雜誌
文具

平町四丁目
柴田書店

